

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 1 7 日現在

機関番号：5 2 1 0 1

研究種目：若手研究

研究期間：2019 ~ 2021

課題番号：1 9 K 1 3 0 9 3

研究課題名（和文）初唐・中唐文学に於ける『玉台新詠』受容研究

研究課題名（英文）A Study on accepted "Yu tai xin yong" during the early Tang and the mid-Tang period

研究代表者

加藤 文彬（KATOU, FUMIAKI）

茨城工業高等専門学校・国際創造工学科・助教

研究者番号：3 0 7 5 8 5 3 7

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は『玉臺新詠』をはじめとする六朝末期文学が、初唐及び中唐期に於いてどのように受容され、乗り越えられていったのかを明らかにすることを主軸とした。特に初唐期は『玉臺新詠』を想起させる修辞主義的な文学を乗り越え、盧照鄰や駱賓王等が新たな詩作の可能性を模索した時期である。彼等の詩作を丁寧に読み解くことで、その具体的な契機を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では初唐の文学趨勢について、六朝末期文学との関連の上から考察した。従来もこのような試みはあったが、それらは主に韻律面や形式面から盛唐詩の胚胎を見出すことが主な目的となっていた。これはつまり、個々の詩人の内的な部分の検討や、それぞれの詩文についてはあまり着眼されてこなかったということでもある。本研究では宮廷外の詩人達の個々の詩文を丁寧に読み解くことで、初唐期の六朝末期文学受容の一端を明らかにした。

個々の作品内部から初唐期の文学趨勢を考察した本研究は、唐代文学史、殊に初唐文学から盛唐文学に至る流れを考える上で、一定の意義を示すことができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research aims to clarify how 『玉臺新詠』 was accepted and overcome during the early Tang and the mid-Tang period. The early Tang period in particular was a time when rhetoric-based literature reminiscent of 『玉臺新詠』 was surpassed, and alternate possibilities of poetry were explored by 盧照鄰, 駱賓王 and other poets. This study examines the specific momentum for another poetic forms that exceed 『玉臺新詠』 from the poetic works of 盧照鄰 and 駱賓王.

研究分野：中国文学

キーワード：初唐文学 四傑

1．研究開始当初の背景

中国文学史を論じる際、初唐期は上官儀や宋之問などの宮廷詩人、また王績や初唐四傑（王勃・駱賓王・楊炯・盧照鄰）等の宮廷外で活躍した文人達が僅かに取り上げられるのみであった。

初唐期は太宗と上官儀との言に代表されるように、六朝期の修辭的文学は理念の上では否定されていたと言えるが、宮廷詩人達は六朝末期の文学を積極的に受容し、煌びやかな詩を制作している。その一方で、宮廷外の四傑等はそれを乗り越え、新たな詩作の可能性を模索している。初唐期の宮廷詩人と非宮廷詩人との屈折した六朝末期文学受容のあり方を手がかりとし、初唐期の文学趨勢を明らかにせんとした。

中唐期の韓愈等による古文復興運動は、儒家的規範の強い秦漢期の文学への立ち返りを目指すものであり、六朝末期文学は否定的文脈の上で語られることが圧倒的に多い。同時期の権徳輿も同様であるが、その一方で彼は『玉臺新詠』に似せた「玉臺體」詩を制作している。ここに初唐期の受容の在り方との共通点を見いださんとした。

2．研究の目的

唐王朝を建国した太宗・李世民は、文化の中心であった南朝ではなく、異民族が跋扈した北朝の出である。だからこそ南朝の文学に憧憬し、更にその文化を引き継ぐことが自らの王朝の正統性を示すことにつながると考え、自らも「徐庾體」を制作するのである。しかし上記に述べた通り、当時は理念の上ではその様な文学は否定されていたのであって、ここに理念と実作の乖離が起こっている。

宮廷外では、四傑等が新たな詩の可能性を模索していくが、彼等の個々の作品は韻律的な側面から検討されることが多く、彼等が宮廷文壇から転向した具体的な契機は詳細に検討されることはなく、個々の詩作に即してその文学観を明らかにするという試みも殆ど行われてこなかったと言ってよい。これらを明らかにすることを通じ、当時の六朝末期文学受容の在り方を宮廷文壇の外側から捉え、初唐期の文学趨勢を多角的に照射することを目的の一つとした。

また、初唐・中唐期の六朝末期文学受容の共通点を探り、初唐四傑から陳子昂を経て、韓愈等そして権徳輿に至る修辭主義文学批判のまなざしの内実を解き明かすことを最終的な目的とした。

3．研究の方法

本研究では先ず、初唐期の王績と盧照鄰・駱賓王という宮廷外で活躍した文人を中心に据えた。前述の通り、彼等は六朝末期文学を批判的に受容してゆくが、その具体的契機についての考察並びに個々の作品への言及は殆どされてこなかった。そこで彼等が修辭主義的文学の素養を有していたことを確認した上で、王績は不遇を、盧照鄰は晩年の病を、駱賓王は投獄経験を転向の直接的な契機であると見なし、その時期の詩文を丁寧に読み解いた。

4．研究成果

王績が若年に制作した「登龍門憶禹賦」は、薛道衡に「今之庾信也」と評されている。これはすなわち王績も、当時の宮廷文壇で必要とされていた修辞主義的文学の素養を有していたということである。例えば賦の形式の中に詩句をいれこみ、反復的表現を行う「三月三日賦」「元正賦」などは明らかに六朝末期文学を意識したものである。しかし、宮廷での栄達が叶わずに隠者として生きざるを得ない状況となった際に求めたのは、その様な文体ではなく平明な文体であった。隠遁後に制作された「遊北山賦」では、仙界も世俗も全てを含んだ絶対的に肯定できるものとしての隠遁空間が示されており、これは宮廷社会に対する敗北感を自認すること、修辞主義的な部分をそぎ落とすことで獲得されたものであった。

四傑等は程度の違いこそあれ、それぞれが修辞主義的文学に批判的な視点を持っていた。それでも官僚社会との関わり、或いは出仕への強い関心を抱いていた時期の詩作に於いては上官體を彷彿とさせる表現を使用している。

盧照鄰については、疾に冒され官吏への道が潰えた晩年に制作された「五悲」「釈疾文」の比較検討を行った。そこでは病に伏した自己を抉出する手段として『楚辞』の文体が用いられており、その中で自己否定と自己肯定とのせめぎ合いがダイナミックに表現されていた。自己を多角的に見つめるこの視点は、宮廷文壇との関わりをもっていた際の作品には表れていない。

駱賓王は、則天武后への度重なる諫言が原因で投獄されている。本研究では獄中で制作された「螢火賦」の検討を行った。「螢」は詠物の対象として詠われることが多く、実際に駱賓王も「秋螢」詩を制作している。しかし、彼が獄中で求めたのはその様な対象としてではなく、螢の高潔な面であった。螢に高潔さを見出しつつ、その様で有り得ない自己を逆説的に発見していく、この自己凝視の営みこそが「螢火賦」の中心的なテーマであった。

上記に述べた様に、本研究で対象とした王績・盧照鄰・駱賓王はいずれも六朝末期文学の素養を有しており、それは宮廷での栄達を目的として十全に発揮されていた。しかし、不遇・疾病・投獄という契機つまりは出仕の希望が絶えた時、彼等はその様な文学を手放し、『楚辞』の文体や平明な文体を用いることで自らを深く凝視していくのであった。

研究当初ににらんだ、初唐の宮廷文壇における六朝末期文学受容の在り方や、中唐との関連にまで考察は至らなかった。しかし、四傑等の転向の契機並びにその際の個々の作品の検討を通じ、初唐期の文学趨勢を宮廷文壇の外側から照射することはできたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 加藤文彬	4. 巻 57
2. 論文標題 駱賓王の獄中詩賦について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城工業高等専門学校 研究彙報	6. 最初と最後の頁 22-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤文彬	4. 巻 56
2. 論文標題 王績「遊北山賦」小考 隠遁空間の肯定	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茨城工業高等専門学校 研究彙報	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤文彬	4. 巻 78
2. 論文標題 盧照鄰「五悲」「釋疾文」考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国文化	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤文彬	
2. 発表標題 盧照鄰「五悲文」「釋疾文」考	
3. 学会等名 中国文化学会	
4. 発表年 2019年	

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------